

羽子板

田中勁一郎

このところ一滴の雨も降らず、好天に恵まれ、田圃には刈り取られた稲株だけが残り、ひっそりとして静かな風景だった。ひ弱い体の私は熱を出して寝込んでいた。熱に浮かされていた私は、この地方の田園風景を心に描いてはそれを愉しんでいたのだ。私がお世話になっている家主夫妻の姿が脳裏を過ぎると、晩秋の寂寞とした侘しさを感ずるのだった。

十六歳になったばかりの私は、郷里を遠く隔てた温泉地の古湯を本拠地に行っている巡回映画班に身を寄せていたのだ。身分は映写技師見習いであった。古湯には後年、木枯し紋次郎を書いた笹沢左保が住んだこともある風光明媚なところである。

私は幼年時代にある病気が原因で声帯を冒され、蚊の鳴くような声しか出なかった。そのため、生徒らはいつの間にか私に蚊と渾名をつけ、虐めの標的にしていた。虐めは中学生になってから、苛酷さを増していた。生徒らは私の声を真似ては私に撲る蹴るの暴行を加えて愉しんでいたのだった。私は遺書を認め、自殺をはかったが死ねなかった。死ぬ勇気がなかったからである。私は死ぬこともできない意気地なしの己を覚っていた。わが家では教職を途中で辞した父と腺病質の母が農業を営んでいたが、父は日本酒や焼酎を叩っては怒鳴りちらし、母を困らせていた。

登校すれば生徒らの酷い虐めに遭い、わが家では酒類を絶つことのできない父の怒声を聞かなければならない。父と子の対話すらなく、少しずつ確執さえ芽生えて行くような気さえした。そんなとき、唯一私の心を慰めてくれるのは裏庭にやって来る蝶とトンボだった。蝶は揚羽のほか、赤、黄、紫色をしたのがひらひらと舞うように飛んで来た。トンボは赤、青、黒と緑のまだらの他、糸トンボもやって来た。糸トンボはおとなしく、目玉の付近と尻尾の先端が白く、丸みを帯びているところに私はえも言われぬ愛しさを感じるのだった。

この年も米国はマーシャル群島のビキニ環礁付近で核実験をくり返していた。第五福竜丸が死の灰を船体一面にかぶり、被災していた。私は曲がりなりにも高校だけは終えたかったが、私の下には弟が一人、妹が三人もいたし、また姉もいたのだから父に学費の捻出を乞うても、とうてい無理であることも覚っていた。たとえわが家が裕福で、高校へ進学したとしても、小学、中学と私の声が生徒らの虐めの対象にされたのだから、高校へ進学

すれば虐めはますますエスカレートしたのかも知れなかったが……。

私と先輩の里元さんが寝泊まりしている宿は農家で、富山の薬屋のおじさんと相部屋だった。食事は朝夕の二食で、囲炉裏の傍の飯台の前に坐って食べるのだった。このとき、家主夫妻の他に、納戸に寝込んで自宅療養を続けている娘のチサも一緒だった。チサという名前であることは、両親がそう呼んでいたから私は知ったのだった。チサがいったい、何の病気に罹って療養を続けているのか、私は知る由もなかった。でも、そんなチサに私は目が合うと、会釈だけは交わしていた。チサは頬が青白く、鶴のように痩せていた。咳くことはなかったが、私はチサの病気は胸ではないかと憶測した。ひ弱い体の私は、十日に一度は熱を出して映画の職務をまっとうできず寝込むのだった。そんなとき、古湯温泉の旅館を常宿にしている興行師の中野さん夫妻はとても優しく労わり、

「気にせんでもよかよ。熱が下がったら、また頑張ってね……」

と励ましてくれた。上映場所では小型映写機二台を里元さんと私が受け持ち、フィルムを番号順に機械にセットして作動させていたのであるが、私が休めばその代役は中野さんが務めるのだった。中野さんも里元さんも、映写技師免許は取得していたのだから。私が熱に浮かされ、夕食にも起き上がれないでいると、

「これ、熱さましや、これ飲むとじきに治るよ」

富山の薬屋のおじさんが、赤いダルマの絵のついた頓服薬をくれた。

「でも、私は素寒貧だから……」

私はおじさんの手を遮り、そういった。中学生時代からすると、少しは増しな声が出るようにはなっていたのだ。

「まあよかよか、有難く貰って飲みなさいよ。越中富山の反魂丹はよく効くからな」

里元さんが傍でそういうと、おじさんは渋い顔つきで、

「反魂丹はお腹のお薬ですよ」

とこたえた。里元さんはおじさんにべこりと頭を下げ、水を貰いに台所へ向かった。すぐ戻って来た里元さんは、冷水を満たしたコップを私の枕元に置き、

「さあ、熱さましを飲んで、早く良くならんば。薬代の方は、気にせんでもよか、俺が中野さんに話しておくからな」

そういつて、私を励ましてくれた。私が巡回映写班に身を寄せたのは、もしかして死場所が見つかるかも知れないと思う心があったからだが、このように人の情に心うたれると、やはり私は自殺することは到底むりのように思えるのだった。郷里のわが家に帰れば、泥酔した父の暴言、乱暴は続くのである。それを思えば、ここは極楽浄土だ。薬屋のおじさんは、何段も積み重ねた薬行李を部屋の一隅に据えていた。里元さんはふだんは無口であり喋らなかつたが、でも、おじさんとはウマが合うらしく、夜、寢床に入ってからよく話していた。人の心情に充実と富贍、沈静と反省の営まれる秋の夜長であった。おじさんの話によると、おじさんの先祖は忍者の一翼を担って異郷の地の情報収集をしていたか。

「お若いの……」

おじさんは不意に私へ語りかけた。私の熱はまだ続いていて、返辞をする気力すらなか

ったので沈黙したままだった。

「生きることは辛いことだが、死ぬことは、もっともつと辛いことだぞ……」

おじさんはそういった。私の心の裡をすべて見透かしたような口吻だったので、私は一瞬、どきりとして瞼を閉じた。心の中を槍で突かれるような思いであった。所謂、人生なんて蜉蝣の一期になんら異なることはないのだ。人の世なんて、夢か幻のようなものだ。最後には水の飛沫のように儚く消え去るのだ。私がそう思ったのは、熱のために体温が火照っていたからかも知れない。

翌日、富山の薬が効いたのか、熱は下がり気分は爽やかになっていた。おじさんは黒い大風呂敷に包んだ薬行李を背負って出かけていたし、里元さんも迎えに来た中野さんのオート三輪車で古湯へ去っていた。私は彼らに遅れて寢床から這い出し、歯みがき洗顔の後、飯台の前に坐ったのだが、母親の傍に珍しくチサの姿があった。

「お具合はどうですか？？ 熱は下がりましたか？」

母親は私の体を懸念して、訊ねた。

「だいぶ、下がったようです。起きる前に計ったら、三十七度ちよつとでした」

「まだ微熱があるようね、寝まれていた方が……」

そういいながら、母親は飯櫃から椀に飯を盛り、囲炉裏の火で温めていた味噌汁を注いでくれた。私は食欲はなかったが、健康保持を考え箸をとった。私の食事のさまを富士額の母親と、三日月眉の娘が見つめていた。

「あなたは、農家のお生まれですか？」

母親が遠慮がちに訊ねた。

「はい、農家の生まれです。いま、父母が農業をやっています」

私は郷里で酒癖の悪い父の後を嗣ぐ考えは微塵もないのであったから、嫌な質問だなと思いつながら渋々こたえたのだった。

「お正月には、郷里へお帰りになるの？」

面長で、青白い顔の唇に黒子があり、見るに忍びずといった感じのチサが訊ねた。私はチサの質問の意味が理解できなかったので、心できよんととしていたのだが、

「帰るかどうか、まだ決めとらんです。ぼつてん……」

それから先の言葉は、私の醜悪な声が遮り、喉の付近で止まったままだった。

「どうかこの娘と、お友達になってあげて下さいませんか」

母親は微笑みながら、私にそういった。私は飯を椀の半分ほど食べて箸を措いた。私は母の嘆願には応えなかったが、私の無言の返辞が納得したものと決めているようだった。少し開いている窓から冷風が忍び寄り、晩秋の情うたた切なるものを私は感じた。

「お正月に、わたしと羽根つきしませんか？」

チサが私を睨んで、にっと笑った。

この年になった男性と……と私は思ったが、それはぐつと堪えた。父親は野良へ出ていくのか姿は見えなかったが、ここにいる母親はわが娘の寿命の短いことを覚っているのかも知れないし、経済的な理由があつて娘を病院へ罹らせられないのかも知れない。チサだって、さほど長くはない己の人生を覚っているのかも知れない……私はそう思った。

「せいっぱい乾燥ぐことは、よかことです」

病身の娘であっても、うら若い身柄である。私は淫刺とした声は出ないが、チサを見れば胸が高鳴った。

「羽子板を、お見せしたら」

母親がチサを促した。チサは無言で肯いて、納戸へ向かった。チサにとっては、己の生命の次に大切なかも知れない羽子板……私はどのような羽子板なのか少なからず興味を覚えた。いま、私の眼前にいる母親は、私が都会の風に染まっていず、農村育ちの若者だから、安心してわが娘を委せられる。そう思っただけにチサを慰めてくれるよう嘆願したのであろう。私にはそう思えてならなかった。しばらくして、チサが羽子板と赤い羽子をもって来た。私はチサが手にしている羽子を見て、これでチサと追い羽根をして遊ぶ……そう思った。

「どうぞ、見てちょうだい……」

チサがそうだったので、私はチサの手から羽子板の一枚を受け取り、しみじみと眺めた。羽子板には島田に結った日本髪女性の絵がとても艶やかで、髪に挿している金色の簪が由緒あるわが国の伝統を感じさせていた。私は大和なでしこの美人が描かれている羽子板をチサにかえた。

「お正月に、この羽子板で、羽根つきしましょうね」

チサがふたたびせがんだので、
「うん、約束するよ」

私は右手の小指をチサの方へ差し出した。すると、チサも右手の小指を差し出し、私の小指に絡めた。この光景を見た傍らの母親は微笑していた。

翌日、体温が平熱に下がったので私は映画班の職務に復帰することにした。朝食を終えると、中野さんのオート三輪車で古湯の旅館へ向かった。里元さんが助手席に乗り、私は荷台に乗らなければならなかったが、これは身分上やむを得ぬことであった。昼食は中野さんが旅館側と契約を結んでいるので、なんの懸念もなかった。旅館の一室を借りている中野さんだったが、一室に入ると、さっそく私と里元さんは職務に邁進する。この週の映画は木村功、津島恵子主演の足摺岬だったので、上映場所付近に貼るビラに、日時と場所を書き込む作業や、それを貼りに行く作業だった。中野さんは鎌原、葛ノ尾、遠くは北山、小城までも足をのばし、営業活動に余念がなかった。この日、足摺岬を上映する場所は古湯温泉旅館街からさほど遠くない真言宗の寺院で、ここは本堂を客席として拝借することに話がついていた。他は地域の公民館や秋が終わるまで、露天の広場などだった。上映場所を一巡すると、中野さんはフィルムをオート三輪車に積んで駅まで行き、それを発送して到着しているフィルムを積んで戻るのがだった。

昼食は郷土料理のご馳走だった。このとき、私は眼前の茶瓶を見て、郷里の父のことを思った。泥酔した父はよく茶瓶を投げつけていた。母はその都度ほうほうの体で逃げている。庭の一隅には、注ぎ口の欠けた茶瓶が山のように増えていた。私は針の筵に坐っているような気がして、とても辛い思いがしていた。中学生時代に酷い虐めに遭ったことと重なって、私は死後の世界を羨望し、何度か自殺を試みたが意気地なしのために、悉く失敗

に終わった。でも、いまでも死場所を探していることに変わりはない。私が熱に浮かされているとき、富山のおじさんが……生きることは辛いことだが、死ぬことはもつと辛いと辛いことだぞ……といった言葉が甦ってきた。顔色の冴えない、痩せさらばえたチサの……お正月に、この羽子板で、羽根つきしましようね……といった言葉も。昼食が終わった後の一時間を、中野さんは私たち二人に自由時間として与えていた。私は外に出て温泉街のすぐ近くを流れる嘉瀬川を眺めた。川辺の疎林は蕭條として、水の流れは瑠璃よりも清く感じた。私は天涯の孤客、夢に故郷を望むのそれで、射す日影も鈍い川の流れと、水に磨かれた玉のような石ころを見やった。

寺院での上映開始時間は午後七時だが、その前に映写機を据えつけた傍で私は人寄せのために、拡声器に繋がれている蓄音機から歌謡曲を流す。里元さんは電源の点検をしたり映写機の点検をしたり、フィルム of の整理をしたりしていた。露天興行のときは、中野さんの奥さんが入場料徴集係で、中野さんは横合いからこつそり入りこむ不遜な輩の看視係を務めていたが、屋内興行のときは中野さんが入場料徴集係だった。奥さんが姿を見せることは殆どなかった。

上映開始三十分まえごろから、ビラを見たり、歌謡曲を聴いた老若男女が続々と詰めかけた。私は二十世紀フォックス社の撮影したニュースフィルムを映写機にセットし、里元さんは足摺岬をセットしていた。足摺岬のビラには、大学生姿の木村功と若くて清純な姿の津島恵子が描かれ、文学巨編と大々的に謳われていたので、私はこの映画に少なからず興味を抱いていたのだ。夕食はチサのいる常宿で食べるのだから、その間は仮夕食のパンを齧るのであったが、それでも棘のように冷たい郷里の父の傍にいるよりも幸せであった。私の脳裏を、チサの佛が過ぎった。

……チサと指切りまでしたのだから、約束はぜったい守り通さなければ。

私は自分の心に強くい聞かせた。上映開始時間がきたので、私は傍の里元さんに合図して、たぶん僧侶も坐っているであろう本堂の明かりを消し、映写機のスイッチをオンにする。とたんに暗闇の人々の頭上を一条の光線がはしり、拡声器

から流れる伴奏とともに、前方の銀幕いっばいにニュースの画面が映り出す。ニュースはものの十分もすると終わるのだが、ザーエンドの英文字が出る寸前で私は里元さんに、

「用意——」と声をかける。すかさず、里元さんが、

「用意——」と鸚鵡がえしの応答をする。里元さんの声を確かめた私は、次に、

「スタート——」と声をかける。

「スタート——」里元さんが映写機のスイッチに指を当てる。

「はい——」私は声と同時に映写機のスイッチをオフにし、里元さんが自分の映写機のスイッチをオンにした。里元さんの映写機から、足摺岬の画面が銀幕に映り出す。私はニュースフィルムを巻き戻し、二巻めの足摺岬のフィルムを映写機にセットする。銀幕は見られなかったが、私は拡声器から流れる音声に耳を敬っていた。セットが終わると、里元さんが映している一巻めのフィルムと、二巻めの私のフィルムを切り換えるまで、三十分ほど間がある。その間、私は銀幕を窺くことができる。

私は銀幕に目をやった。何十メートルあるかわからないほどの断崖絶壁の足摺岬……断

崖の下には逆巻く怒濤が猛り狂い、白い飛沫をあげている。海面に身を投げたら、渦に巻き込まれ、海面に浮上することはないという怖いところだ。木村功扮する大学生は病弱のため、死場所を求めて足摺岬までやって来たのだった。でも、雨の中、足摺岬まで行った彼は死ぬことができなかった。雨に濡れた彼は高熱を出し、宿へ戻る。自殺に失敗した儂さを、津島恵子扮する宿の娘が優しく労わり、介抱する。宿の相部屋には年老いた遍路とオイチニの薬売りがいた。大学生は父親との確執のために、苦学していたのだった。そのために、懐は淋しかった。だから、宿にも長くは逗留できない身の上でもあったのだ。遍路と薬売りは熱に浮かされている彼の傍で将棋をさしていたのだが、薬売りは彼の顔を覗いて、

「だいぶ、熱があるようじゃ」

といった。大学生は胸を病んでいたのだった。薬売りは錠剤の入った紙包みを彼の枕元に置いた。

「これで、じきに治るぞね」

と、老いた声でそういった。

「私には……」彼はそういって、遮った。

「わかっておる。金のことなど、気にしなくてもよいのじゃ」

老人は微笑んだ。私はこの映画が終ってから、あまりにも私の境遇に酷似していたので、心を動かされてならなかった。他人の空似といって、世の中には似た人間が三人いるという。似た境遇の者がいたって、不思議はないのだと私は思いなおした。職務が終わって常宿に帰ったのは午後十時過ぎだった。映画で見た薬屋が、手風琴をならしながら、オイチニの薬の効験は、産前産後の血の道や……という声と、最後のあーオイチニ、オイチニという声がなんとなく哀愁をおびていて、いつまでも私の心から消えなかった。宿ではチサを始め、夫妻は寝んでいて、飯台の上に夕食が並べてあった。その傍に私宛の封筒があった。裏を見ると母からだった。里元さんは箸をとっていたが、私は封筒の封を切り手紙を読んだ。手紙にはすぐ帰るように認めてあった。母の意中は理解できたが、針の筵には坐りたくなかった。でも、私はひとまず郷里へ帰ろう……そう心に決めた。翌日、私は中野さんに母の手紙を見せ、了解を得て郷里へ帰ったのだが、わが家には十日しか居なかった。私は風のごとく古湯へ舞い戻ったのだった。常宿に着いて中に入ると、家主夫妻がいつもより元氣のない姿で歓迎してくれた。

「お帰りなさい」

チサの父親がそういった。チサはいつものように、納戸で寝んでいるのだろうと私は思った。

「チサは亡くなりました」

「えっ！」私は母親の言葉が信じ難かったので、母親の顔を見つめた。

「どうぞ、お座敷の方へ」

母親はそういって、私を座敷の方へ誘った。そこには小さな真新しい祭壇があり、その上にチサの遺影と位牌があった。位牌の傍には骨壺、その横に羽子板と羽子があった。指切りまでして私と羽根つきを楽しみにしていたチサ……。私はいつまでもチサの遺影を見

つめていた。

「早く戻れなくて……ごめんなさい」

私は心で詫びていた。死場所を探していた私であったが、かけがえのない物をなくしたようではならなかった。

その後、チサの面影は私の心の隅から消え去ることはなかった。私たち巡回映写班は映画興行をひとまず中止して、小城に向かった。小城は羊羹製造で有名なところである。興行師の中野さんは、浪曲師や劇団を呼びよせることもあった。今回は伊丹明一行を小城の町へ呼んだのである。伊丹明は伊丹秀子と師弟関係にあり、後に秀夫と改めるのだが、美声の持主で浪曲師青年横綱であった。

中野さんの運転するオート三輪車は小城駅へ向かって疾走する。浪曲師一行は午後三時すぎの下り唐津行きで来るという。浪曲の世界は私にとって未知の世界であったから、少なからず心の隅に不安な霧りがあったことは否めない。

小城駅に着いて、中野さんは里元さんと私を下ろして、奥さんと小城の町へと去って行った。駅前の壁に、伊丹明一行のポスターが貼ってあった。二人は駅の待合室の椅子に腰を下ろして、浪曲師一行を待った。里元さんは退屈さを紛らすために、雑談を始めた。

「女はなあ……」

そういつて、里元さんは自慢する。

「はあ……」私はきよとんとして、里元さんを見つめていた。

「男の積極性に弱いのだ」

「はあ……」

私は里元さんの言葉の意味を、よく飲み込めぬまま肯いた。私の脳裏に、チサの面影が去来していたし、里元さんの雑談など、聞きたくなかったからだ。

一時間ほど待って、黒煙を吐いた機関車にひかれて、唐津行きの客車が到着した。私たちは、ホームに佇んで、浪曲師一行を出迎えた。数人の乗客が降りた後から、スーツケースを提げた四名が降りた。二人は女性で、傍に女の子がいた。私は直感で、浪曲師一行だと覚った。

「中野さんの身内の者です。おもちしましょう」

里元さんがそういつて、手を差し伸べたので、私も彼に倣って、若くて瘦躯の人に、

「お疲れさま、おもちしましょう」

と、手を差し伸べた。

「おねがいします」

上品な言葉づかいをするその人が、私の手に、スーツケースを委ねてくれた。私たちは浪曲師一行をまじえて、小城の公民館まで歩いた。このとき、私の手に荷物を委ねた人こそ、伊丹明であると覚った。公民館が浪曲師の一夜の宿であり、私たち映写班も同宿することになっていた。浪曲大会の会場は公民館からさほど遠くない、公園広場であった。私たち映写班一行は露天興行には慣れていたし、珍しいことではなかった。

公民館に着いた浪曲師一行は、湯茶を啜った後、喉をひっぱり、

「なにがなににして——なんとやら——」

と、発声練習を始めて余念がなかった。夜具の準備は地区の婦人会の人たちが携わっていたし、私は里元さんと会場である公園一帯を徘徊することにした。公園には、いろんな樹木があり、滑り台その他、子供の遊戯場が設えてあった。

「人間ってなあ……」

里元さんが語りかけた。問わず語りであった。

「……………」

「命運どおりに生きて行くとたい。命に宿っている己の業から、決して逃れられん」

里元さんがそういったとき、

「お——い、捜したぞ。夕食じゃ——」

中野さんの声があった。私たちは手を挙げて、中野さんに応えた。公民館にもどると、長い飯台に、白い飯が盛られた椀がならべてあった。私たち映写班の者は、浪曲師一行とさし向かいで坐り、食事をした。このとき知ったのだが、伊丹明のほか、男は実弟の秀敏であることがわかった。兄は小柄だが、弟は大柄である。兄弟であっても、体格はちがうのだなど、私は不思議な物を目にしたように思えてならなかった。女は子連れの方が浪曲師で、年輩の方が曲師であることもわかった。浪曲師の唸る曲目もわかった。明の曲目は瞼の母であった。すばらしいなあ……と私は思った。夜のとばりがおきるころ、公園には老幼男女がぞくぞくとつめかけ、浪曲大会が始まった。口演料は町内会が支払うので、私たちは木戸番をする必要もなく、露天の座席で里元さんとそれぞれの浪曲を聞いていた。中野さん夫妻も、耳を敬て、浪曲を聞いているようであった。

美声で唸る明の瞼の母を聞いて、私は思った。私の喉からは醜悪な声しか出ないが、でも、いつの日か私は、大勢の民衆のまえで、浪曲を唸ってみたい。儂い念願ではあるが、寿命がすぎるまでに、森の石松などの侠客伝をやってみたい。いつの日か、きっと、いまはなきチサが応援してくれるであろう。

公園での浪曲大会が無事終了してから、浪曲師一行と私たち映写班は公民館で雑魚寝をした。夜具の都合もあり、私は明と寝たし、里元さんは秀敏と同衾していた。

中野さんが郷里へもどり、経営している記念館へ大映所属の鈴木澄子一座を呼んだのは、それから間もなくのことだった。記念館は私の郷里の炭鉱町にあったのだから、私としては馴染み深かった。鈴木澄子は化け猫の演技で名をなしていたので、この女優と片言でもいいから話せたら、という淡い期待感が私の心の裡に巣くっていたことは否めない。

鍋島猫上演当日、里元さんは郷里へ帰っていたので、私はただ一人、楽屋側に突っ立って劇団側と劇場側のパイプ役をつとめていた。この日の千両役者である鈴木澄子は、唇は耳まで裂け、目をつり上げた化け猫の顔だった。両手の爪先には、尖った爪をつけていた。演劇が始まると、私はいささか緊張気味で澄子のセリフを聞いていた。

「おのれ鍋島——おのれ鍋島——この恨み晴らさいでなるものか——」

澄子の喉から迸る声を聞いて、私は演劇がクライマックスに達したことを覚った。そうしているうちに、拍子木の音が聞こえた。幕を閉じるらしい。やれやれ……私は胸をなでおろした。側役に続いて、澄子が楽屋へ姿を現わした。顔一面ドーランをぬりまくって

る澄子……。その澄子が、私に、

「ちよっと、これを……」

そういつて、小さな品物を私へ手渡した。

「はい……」私は背いて、澄子の手から品物を受け取った。品物の中身がなんであれ、私には興味がなかったし、片言であっても、女優の鈴木澄子と言葉をかわせたという喜びの方が大きかった。

私は澄子からの品物を手に、劇場の管理室へ向かった。管理室は楽屋から西の方角へ離れたところに家屋があり、事務所兼食堂兼寢室であった。もちろん、中野さんが管理していて、移動映写班一行の宿泊所でもあった。中野さんの奥さんの姿はあったが、中野さんは不在であった。劇場の方へ赴いているようであった。奥さんは台所にいて、食事の準備をしている様子だった。

「鈴木澄子さんから、これを……」

私は奥さんにそう告げた。

「あら、そうなの」奥さんは澄子からの品物を受け取り、かわりに、懐中から紙片をとり出して私に渡した。

「あなた、実家から、電報がとどいてますよ」

「電報が……」

いったい、なにごとなんだろう。私は高鳴る胸をおさえて、電文を読んだ。

キユウヨウアリ カエレ チチ

「中野には、わたしが伝えておくから、このまま、お帰りなさい」

「いいでしょうか？」

「いいわよ。お父さまが、お待ちかねのご様子だから」

奥さんは嫣然と佇んで、私の顔を見ていた。

「すみません」

私は低頭して、裏口から出て、バス停まで急いだ。アルコール依存症の父が、私に帰省を促す電報をよこすとは、いったい、どういうことなのか。私には父の心境が理解できなかった。でも、電報をよこしたからには、帰らないわけには行かなかった。家に辿り着くと、珍しく父は素面であった。時おり顔を見せていた豊村さんの姿もあった。

「おお、帰ったか」

父がそういうと、傍の豊村さんが、

「お帰りなさい。待ちかねていましたよ」

そういつたので、私は怪訝そうに、豊村さんを見やった。豊村さんは隣町に住む実業家で、いつも背広を着ていた。

「おまえを東京へ就職させてくださるそうだ。東京へ出て世間をみつめたら、どうだ」

素面の父の言葉は、真剣そのものだった。

「行きましよう、東京へ。わたしの身内の者が東京で会社をやっていますんで、職の方は心配いりませんよ」

豊村さんが、しきりに私を促した。

「はあ……東京かあ……」

私は夢を見ているような心境であった。華の都の東京へは、生涯行くことはないであろうと、心に言い聞かせていたのであったが……。かの浪曲師の伊丹明も、大映女優の鈴木澄子も、東京からやって来たのだ。こんどは、私が東京へ行くのだ。私はそう思った。

「どうだ、決心がついたか」

父の言葉に、私は応えなければ……そう思った。かつて、吉田松陰が江戸の小塚原で刑死するとき、親思う子にまさる親ごころ……と詠んだ。私は松陰のこの言葉を思い出していた。

「うん、決心がついた。上京しよう」

私は父のことをアルコールばかり嗜む、とんでもない人とはばかり思っていたのだが、父は子の私の行く末を案じてくれていたのであろうか。

「決心がつかましたか。じゃあ、三日後に佐世保から急行西海号で上りましょう」

豊村さんが柔和な笑顔でそういった。東京へ行くのだ……。私の心は穏やかではなかった。華の都で、人間の本质を見極めるのだ。そう思うと、私の心は疼いた。移動映画班を辞めた私は、西海号に乗り込む前夜、豊村さんの家に泊めてもらった。佐世保駅までは、豊村さんの方が距離的に近いからだだった。

こうして、私は東京の深川に住みついたのであったが、年端もゆかない少年のせい、職場にも地域にもじきに慣れることができた。私の職場は何千度という高温でガラスを溶かし、大小さまざまな瓶を作る工場だった。社名は日東制作所といい、私は見習い工だから、職人の作った瓶を大きな窯へ運ぶ仕事だった。職場には工場直結の独身寮があり、その中に食堂や浴場があった。部屋は六畳に三人が寝泊まりしていた。この中の一人が蓄音機をもっていて、ときおりレコードをかけて私に聞かせてくれた。曲目はわからなかったが、青い鳥いと——しや、と、夢も情け——も、ない故郷へ——という唄い出しで、ともに暗い感じの歌であった。同僚は遠い故郷を思う私を慰めるつもりで、レコードをかけてくれたのだった。

日曜日になると、私は浅草や、八重洲、日本橋あたりをうろついていた。独り身の私は気楽でもあったが、話し相手もないし、少し寂しかった。浅草へは錦糸町からバスで行ったし、八重洲、日本橋方面には深川東陽町から路面電車（私は心中、この電車をチンチン電車と呼んでいた）に乗り、門前仲町を通って東京駅前下車していた。その足で、皇居二重橋前の広場へ赴くこともあった。

若くして逝ったチサのことを忘れたわけではなかった。あの羽子板で、羽根つきして遊ぶことのできなかったことが残念でならなかった。路面電車で日本橋を通過する際、私は彌次さん喜多さんが登場する東海道中膝栗毛を思い出して、お江戸、日本橋、振り出しに——という歌の文句どおり、この橋は有名なんだと眺めやった。

あの日、小城で心に誓ったことは、上京してからも忘れることはなかった。そういう機会が到来するかどうか、私には未来のことはまったく不明だが、これからの長い歲月、ひたすら待ち続けなければならない。平日は仕事が終わってから、深川東陽町あたりをぶらついたたり、町道場があったので、ここで柔道の乱取りなどをした。夜だから、附近一帯はネ

オンがともしり、田舎では感じるこのできない華やかさを私は感じた。深川東陽町を門前仲町の方へしばらく歩くと、左側に洲崎パラダイスという文字のネオンが輝いていた。このネオンの煌きは、他とはくらべものにならないほど艶やかであった。

このネオンの下を、タクシーがひっきりなしに往来していた。パラダイスというネオンの煌きがなにを意味するのか、少年の私にも理解できた。往のタクシーは欲望に渦巻く客を乗せ、来のタクシーは満足感にあふれた客を乗せて帰る。この模様を見た私は、人間の本质を見極めたように思えてならなかった。

春風秋雨、すでに二十年という言葉がある。春の風をおくり、秋の雨を迎える寂しさ……。私の父母もいつの間にか年老いていた。私は同僚が聞かせてくれた蓄音機から流れる歌の文句にある、夢も情けない故郷へ舞い戻っていた。あのとき、私を東京へ誘った豊村さんも姿を見せなくなっていた。歳月とともに、いろんな人がこの世から姿を消していた。私は老境にある父母の姿を見ると、東京での思い出はもろろん、古湯温泉でめぐり会ったチサ、大映女優の鈴木澄子、それに浪曲師の伊丹明のことをよく思い出すことがあった。

私はある日、西日本新聞の声の欄に伊丹明との出会いを次のように書いて、投稿した。

私は若いときに、興行師の手伝いをしていた。ある日、浪曲師一行を迎えに、佐賀の田舎へ行ったことがある。一行は、休む時間もなく喉を引つ張り、発声練習をしていた。私は練習に余念のない彼らを見て、さすがにプロだな、と感心した。

一世を風靡した伊丹明、私は感慨深く彼の声を聞いた。興行が終わると、一行は公民館にぎこ寝した。私も伊丹明と一緒に寝た。彼の方から私を指名したのだった。彼は布団の中で、寝物語にいろいろ語ってくれた。長い人生のこと、運不運がたえずつきまとうこと、など。彼の話聞いて、陶淵明の詩の一節、一生またよく幾ばくぞ、倏として流電のごとし……を思い出していた。これから先も、私の行く手に、さまざまな障害物が待ち構えていることであろう。私はそれら障害物一つ、また一つ乗り越えて行かねばならないと思った。

あれから長い歳月が過ぎ去っている。あのときの、伊丹秀子の弟子、伊丹明のことが思い出され、いつまでも忘れられないのである。

私は自分を慰めるためには、こうでもしなければ治まらなかったのである。掲載されるという当てはまったくなかったし、ましてや、掲載されても反応があるとは思いませんでした。おそらくボツになるであろうと、半ば諦めていると、掲載されたのだった。ボツになるよりは増した。私は爽快感にひたりながら過ごしていた。そんなおり、突然、伊丹明から手紙が届いたのだった。西日本新聞の声の欄に掲載された、人生への心構えを浪曲師に教わった、という見出しの文章に対する返信だった。

前略 先日あなたが新聞にお載せになったのを切りぬいて、私のところへ送って下さっ

た方があり、びつくりしました。ずいぶん昔のこと、私の言葉の端があなたの胸につきま
とっていたと思えば嬉しくなりませんでした。私は小さい頃より伊丹明と名乗って、苦
勞しながら全国を歩きました。色んなことがあり、思い出すのも大変です。嬉しいこと、
悲しいこと……人生への道のりは、いばらでした。

いまは数年まえ、東京の新宿、安田生命ホールで伊丹秀子師から舞台口上をきっていた
とき、伊丹秀夫と名乗っています。花の若武者、那須与一の物語でNHKに出演したとき、
優秀賞をいただきました。伊丹秀夫と改名してから、ラジオではよく放送していました。
まだまだ未熟者です。これで良いということは、人生にないのですね。

自分のことばかり書きつづりましたが、あなたの心にうたれて、早速ペンを取りました。
いまではうつろな覚えしかありませんが、ぜひお会いできたらと思います。きっと、いつ
の日か会える日を楽しみに、神に祈っています。

伊丹明こと

伊丹秀夫

私は彼の手紙を読んで、彼は東京の葛飾区の住人であることを知った。人生への道のり
は、いばらだったという。私は彼の境涯がわかるような気がした。私も東京から帰った後、
悲しいこともあった。いちばん悲しかったことは、父と子でありながら、歯車がうまく噛
み合わなかったことだった。父は子の私を説得するのに、駐在所の巡査を呼びよせて味方
につけた。私は父を責めたてるわけではなかったが、制服巡査の顔を見るに及んで、父の
しぐさを憎んだ。無性に腹が立った。でも、どうする術もなく、力のない自分自身を悟る
しかなかった。

それから、再び長い歳月が過ぎ去った。父母はこの世にいなかった。私は老境にあった。
父と同じ年ごろであった豊村さんも、恐らくこの世に生きていないであろう。若き日に、
私を東京へ誘ってくださった豊村さん……。私はこの方が懐かしく思えてならなかった。
そうこうするうちに、突然、私に地域の長生会の会長から、入会するよう勧誘をうけた。
長生会はひと昔まえまで、老人会と呼んでいたのだが、世の推移とともに、いつの間にか
長生会と呼ぶようになっていた。

「いまさら、長生会に入っても、どうなるものでもないしねえ」

私は会長を睨めつけ、ていよく断わった。

「高齢者のつどいだから、いまさら人間の本质を見極めるとか、そんな哲学じみた会では
なか。ばってんな、人生という問題を模索すれば、これで完璧ということはない筈じゃ。
だから、この会に入ってみたら」

会長は執拗にねげる。でも、私の心は動かなかった。入会してグランドゴルフやペタン
クなどの競技で汗を流すこと。納涼大会や忘年会ではしゃぐことなどは、あるいは老境に
ある者にとっては、健康上有意義であるかもしれない。だからといって、私は即座に入会
の決心はできないのだった。

「熟考してから……」

「そうですね、残念だね。でも、わたしは諦めません」

会長は言葉尻に含みをもたせ、柔和に微笑ってから、帰って行った。会長が帰ってから、私は考えてみた。伊丹明（秀夫）からの手紙には、これで良いということは、人生にないのですね、とあったし、会長も人生という問題を模索すれば、これで完璧ということはない筈、といっていた。私はどうしたものかと思案に暮れた。チサの面影が脳裏をよぎった。私はチサのことが忘れられずに、この年になるまで独身をつらぬき通していたのだった。私は心の裡でチサに訊ねてみることにした。

「チサ、あんたはどうなんだ？」

「いいことだと、思いますわ」

チサは微笑んでいた。

「そうか……賛成だな」長生会に入会して、どのような活動をするようになるのか、私には先は読めなかったが、チサの一言で、ほんの少しだけ、心が動いたような気がした。私は壁にかけている暦を覗いた。八月……AUGUSTであった。

会長の再訪問をうけたのは、翌日だった。私は気が進まないそぶりをしていた。

「どうか、少しは心が動いたかな。あんたに入ってもらうと、会に、活気が漲るんでな」

「それって、どういう意味かな？」

私はおだてられるのが嫌いな性分であったので、怪訝しい表情で詰問した。

「民生・児童委員として、国から委嘱をうけている人でもあり、あんたが入ると、好都合っていうことたい。元をただせば、老人の集団じゃからな」

会長の禿頭から、後光がさしていた。眼前の会長からそういわれてみれば、現在の私は、まがう方ない民生・児童委員である。民生・児童委員信条の第一条に、わたくしたちは、隣人愛をもって、社会福祉の増進に努めます。とある。また児童憲章の第一条に、児童は、人として尊ばれる。とある。民生・児童委員であるからには、世のため人のために動かなければならない。

「末席を汚すことになるかもしれないが、入会しましょう」

「入ってくださいるか、ありがとうございます。感謝します」

会長の顔がほころんでいた。

「会のことは、なにもわからん。ばってん……」

「後日、班長さんの方から、定例会の日どりとか、会費については連絡があると思うから。活動の種目とか、日程とかは、定例会のおりにでも、お話ししましょう。なにぶん、よろしく願いますよ」

会長はそういって、喜んで戻って行った。残暑は容赦なく続いていた。早く涼しくなればいいのに……私はそう思って、額の汗を拭いた。会長が告げたとおり、それからしばらく経ってから、地域の班長から電話連絡があった。会費は年単位で一千二百円で、定例会は奇数の月に、地域のふれあいの館で午後一時三十分開会ということだった。

九月……SEPTEMBER

定例会の催される月であり、私が初めて出席する月でもある。会は十五日に開催されることが連絡をうけて判明していた。私は指折りかぞえて、その日を待ったのだが、私にと

つては重苦しい毎日であった。十五日当日、いつもより早めに昼食をたべ、髪をなで、日中はまだ暑いので、長袖シャツ一枚で出かける。私がふれあいの館に辿り着いたときには、多数の男女会員が据えられた長テーブルの前に坐っていた。私は少しばかり、きまりが悪かったが、いまさら引き返すわけにも行かず、ままよと思つて低頭して末席に坐った。

「あ、来てくれたね。お疲れさま」

会長は笑顔で歓迎してくれた。女性会員の一人が私の眼前に、湯茶を注いで差し出した。みなそれぞれ、雑談を始めていたが、私はまだ話し相手もいなかったもので、無言のまま開会を待つていた。

十一月三日の文化の日に、三地域合同の福祉大会が開催されるとか。場所は町の公民館で、出し物は詩吟とか舞踊が殆どだが、わが地域は今年は趣向を変えて、なにか新しいものを出したい。会長はそう話して、私に白羽の矢を立てたのだった。

「去年も一昨年も詩吟をやったが、毎年、詩吟ばかりじゃ飽きぐる。あんた、なにか隠し芸ないかね。他の地域が、びっくりするようなものが」

会長は哀願するような眼差しを私に向けた。会長の執拗な入会勧誘はここにあつたのか……と思つたが、私のはたして他人を唾然とさせるような隠し芸を持っているかどうか、会長は知る由もないのだから、と打ち消した。

「やりましょう」

私は会長の言葉に、受けて立つ覚悟でそう応えた。

「いい出しものが、あるかな？」

「浪曲を、やりましょう」

蚊の鳴くような声しか出ないが、大勢の民衆のまえで俠客伝を唸ることは、私にとって長年の夢でもあつた。その夢が適えられるということは、きつと草葉の陰にいるチサの力によるものだろう。

「浪曲……なにわ節か」

「次郎長伝の森の石松、こんびら代参……を」

「いいねえ……頼むよ」

会長は私の肩をぼんとたたいて、激励してくれた。十一月三日の文化の日まで、一ヶ月半ほどの日数がある。それまでに、なんとか次郎長伝の森の石松、こんびら代参を覚えなければならぬ。私はプロではないし、アマもいいところだから、だからこそ、この企画は、あるいは成功するのかもしれない。

十一月三日までには、ピタニコ大会やグランドゴルフ大会もあることだろう。私はスポーツは苦手だが、でも、会長の要請があれば出場しないわけには行かないだろう。隠し芸はやれても、スポーツはやれないとはいえないだろう。スポーツの方は形だけに留めて、問題は浪曲である。私は喉を引っぱり、なにがなににしてなんとやら——と、声を出してみる。蚊の鳴くような声であっても、気迫がこもっていると思う。チサが逝つて、傷心がまだ癒えないころの小城の町での伊丹明を思い出していた。プロであっても、彼らはたえず発声練習をしていた。手許に、珍ゲームと隠し芸という本がある。民謡や落語など、隠し

芸全般にわたって述べてあるのだが、その中に浪曲名調子集というのがあり、森の石松も載っていた。私は節をつけて唸ってみる。

〽 旅行けば 駿河の国に茶の香り 名題なり東海道……

この本には、出だしの一節だけしか載っていなかった。これだと、ものの三分ほどで終わってしまう。私としては、浪曲だから、十分ほどかけてじっくり語りたい。後は想像にまかせた創作で行くしかない、と思ったが、それではまずいような気がしてならなかった。考えた末、町の書店に出向いて行くことにした。書店経由で、次郎長伝のDVD、森の石松が入手できないものか、と思ったからだ。

書店に尋ねてみると、書店ではコンピュータを操作して、検索してくれた。私は佇んで、書店員の指の動きを凝視していた。

「ありました！」書店員が私の顔を見やった。

「ありましたか……よかった」

私は町の書店に出向いて来てよかった、と思った。見すてる神があれば、助ける神もあるのだ。ふだんは無神論者で通していたが、このときばかりは、そうもいえなかった。

「スパックというところが、発売しています。二代目の広沢虎造の清水次郎長伝となっております」

「森の石松は、ありますか？」

「ございます。第一話の、こんぴら代参から、第一〇話の、追分宿の仇討ちまで、DVD五本がセットになっていますが」

「お手数おかけしますが、注文いたしますから、よろしくお願いします」

「一本が三千百五十円ですが、よろしいでしょうか」

「いいですよ、注文してください」

私は書店員に依頼しておいて、書店を出た。見つかって、よかった……再びそう思った。それから、品物が書店にとどく日数が待ち遠しかったが、書店から到着の電話をうけたときは、小躍りしてよろこんだ。

受けとってみると、第一話石松こんぴら代参、第二話石松三十石船、第三話石松と身受山鎌太郎、第四話石松と都鳥一家、第五話石松と七五郎、第六話えんま堂の欺し討ち、第七話お民の度胸、第八話石松のさいご、第九話追分三五郎、第一〇話追分宿の仇討ち、となっていた。

その日から私はDVDをコンピュータのドライブにかけ、喉を引っぱって、本格的な練習を始めた。

〽 秋葉路や 花たちばなの 茶の香り

流れも清き太田川……

一年に一話ずつすませるとすれば、十年かかることになる。それはさておくとして、十

一月三日は必ず到来する。その日まで、とにかく、発声練習をしなければならぬ。いまはなき、チサのためにも、私はがんばらなければならぬ……そう思った。

く 秋葉神社の参道に うぶ声あげし快男児
遠州森の石松に……

喉を引っぱり、唸り声をあげていると、無性に羽子板で羽根つきがしたくなった。あのとき、チサと約束を交わしておきながら、それができなかったことが残念に思えてならなかった。

十一月 NOVEMBER 三日……ついにその日が到来した。プロは和服を着て演壇に立つようだが、私はアマもいい方だから、和服など着たくなかった。スーツに、映えるように黄色のネクタイを締める。腕時計に目をやり、唸ってみる。

く なかに名高い羽衣の 松とならんでその名を残す
海道一の親分は……

庭先に佇んで、会長が手配してくれたタクシーを待った。長い間の念願だった大勢の民衆のまえで、浪曲を唸るといふ、決定的瞬間が刻々と近づいている。私の胸は高鳴った。公民館に着いて受けつけをすませ、中に入ると、右の壁側が市長はじめ、福祉関係のお歴々の席で、左側は三地域の長生会々長と副会長の席であった。一般観覧席は中央で、私は中央の末席に陣取る。やがて開会式が始まり、市長の挨拶を皮切りに、お歴々の挨拶、それがすむと、喜寿、米寿などの表彰があった。いよいよ各地域の隠し芸の披露だ。すべての席に折り詰めが配られ、女たちが酒やビールを注いで歩く。他地域の隠し芸が始まる。予想どおり、他地域は詩吟と舞踊だった。観覧者は折り詰めの肴を食べ、アルコールを嗜んでいた。私の出番がまわって来たとき、少しばかり酩酊したのをいいことに、私は立ちあがって一礼すると、演壇に向かった。場内にはいっせいに、拍手の音が響きわたった。

チサの笑顔が脳裏にひらめいた。

――

作者略歴 昭和十三年生まれ 七十二才。高校中退後父の農業手伝いをする。旺文社全国学芸コンクール小説部門佳作、実業の日本社職場のドキュメント募集に優秀賞、文芸思潮エッセイ賞募集に奨励賞と優秀賞。現在長崎県在住。